

鬼譚の成立

—— <仁和三年八月一七日の鬼啖事件>をめぐって ——

中村 一基*

(1994年12月8日受理)

Kazumoto NAKAMURA

Framing the narrative : Development of Ki -tan (Oni Tales)

はじめに

鬼譚の成立という問題を考えるとき、『日本三代実録』五〇、仁和三年八月一七日の
○一七日戊午。今夜亥時。或人告。行人云。武徳殿東松原西有美婦人三人。向東歩行。
有男在松樹下。容色端麗。出来与一婦人携手相語。婦人精感。共依樹下。数尅之間。
音語不聞。驚恠見之。其婦人手足折落在地。無其身首。右兵衛右衛門陣宿侍者。聞此
語往見。無有其屍。所在之人。忽然消失。時人以為。鬼物變形。行此屠殺。又明日可
修轉經之事。仍諸寺僧被請。來宿朝堂院東西廊。夜中不覺聞騷動之聲。僧侶競出房外。
須臾事靜。各問其由。不知因何出房。彼此相恠云。是自然而然也。是月。宮中及京師
有如此不根之妖語在人口。卅六種。不能委載焉。

という記録の「是月。宮中及京師有如此不根之妖語在人口。卅六種。不能委載焉。」に
ついて、三木紀人が「特定の不気味な一箇月の雰囲気を与えるこの一文をどの程度一般化
してよいものか、必ずしもはっきりしないが、これは、どれほど多くの説話が空しく歴史
の闇の中に消えていったかを空想させる文章ではあろう」【①】と書いているように、多
くの街談巷説が「不根之妖語」として、歴史書において「不能委載焉。」という待遇を受
けていたかを伝えている。この鬼啖事件は『日本三代実録』に記録され『扶桑略記』巻二
一<仁和三年八月一七日の条>にも転載された。書承関係については疑問視されているが、
この鬼啖事件が『今昔物語集』巻二七第八話「内裏の松原にして、鬼、人の形と成りて女
を噉ふ語」という鬼譚の原拠である事は疑いの余地はない。また、書承関係が明確で、
『日本三代実録』に由来する説話としては『古今著聞集』巻一七第五八九話「仁和三年八
月武徳殿の東松原に変化の者出づる事」があげられている。このように、「不根之妖語」
卅六話の中から、偶然にも書き留められた鬼啖事件の記録は、鬼譚(鬼の説話)の成立を
考える上で興味深い材料を我々に提供することになった。この事を説話と歴史の接近、

* 岩手大学教育学部

「説話を記述して行くことも、歴史書を作製する上で重要な方法であった」【②】といった説明がなされている。ただ、「正史は『此の如き不根の』といっているのだから、『説話と歴史とが著しく接近してゐた』わけではない。」【③】という反論もあるが、『日本三代実録』の鬼啖事件を、歴史叙述に組み込まれた説話の問題として正面から考察している論文は少ない。管見の限りでは、吉田 達の『伊勢物語』六段を考える(中の中)－『三代実録』における「鬼」語彙の特色に関する覚書き－【④】を数えるのみである。吉田は『日本三代実録』の原文(鬼譚の部分)に次のような符号を付す事で、自己の解釈を示した。

今夜亥時。或人告。「行人云。『武徳殿東松原西有美婦人三人。向東歩行。有男在松樹下。容色端麗。出来与一婦人携手相語。婦人精感。共依樹下。数尅之間。音語不聞。驚恠見之。其婦人手足折落在地。無其身首。』」右兵衛右衛門陣宿侍者。聞此語往見。無有其屍。所在之人。忽然消失。\\\\時人以為。鬼物變形。行此屠殺。【⑤】

筆者は吉田の取組みを評価しながらも、解釈・結論に対しては女房惨殺事件が鬼啖事件として成立する場の認識の違いから違和感を持たざるを得ない。本稿では、その違和感を明らかにする形で<仁和三年八月十七日の鬼啖事件>の説話的性格を考察したい。

(一) 「今夜亥時。或人告。行人云。」

吉田は、事件について「行人」が語っているのを、「或人」が聞いて「右兵衛右衛門陣宿侍者」に告げたと解釈する。その結果、「然し、それにしても何故同行の二人の婦人たちはこの状況を報告しなかったのだろう。」【⑥】「この事件の第一発見者は彼女たちであったということになる。それを、『行人云』といい、更にその伝聞を『或人告』とあるのは、寧ろ最も不思議とすべきである。」【⑦】といった疑問に囚われざるを得なかった。この疑問は誤読によるのではないか。やはり、ここは「仁和三年八月十七日、亥時ばかりに、あるもの道行人に告げるは」(『古今著聞集』)という解釈が自然である。「或人」が告げた対象は、「右兵衛右衛門陣宿侍者」ではなく「行人」である。ここで、確認すべきは、『日本三代実録』の編者は、この鬼譚を八月に街談巷説として広まった三十六種の「不根之妖語」の一種として書き留めたことである。「或人告。行人云。」と話の根拠の曖昧さを強調したのは、「不根之妖語」であることを証明するための挿入句と考える。則ち「十七日戊午。『或人告。行人云。』今夜亥時。武徳殿東松原西有美婦人三人。」という文脈で読まれるべきであり、「或人告。行人云。」は「時人以為。鬼物變形。」と街談巷説の場の同一性を現している。その意味で『古今著聞集』が「あるもの道行人に告げるは、～鬼のしはざにこそ。」と、或る者が鬼譚として語ったとしているのも頷ける。「不根之妖語」としながらも、編者が書き留めたのは一箇月で「妖語」三十六種という事態に異様さを感じたからであり、二種の「妖語」が内裏近くで起こった異変であったからであろう。【⑧】

(二) 事件の報告者。

吉田は「この報告はいったい何れの官衙より提出された原資料に基づくものであろう

か。【⑨】と『日本三代実録』の記録を公の役所からの提出資料に基づくと考え、「『今夜亥時』と始められているのは、明らかに『右兵衛右衛門陣』よりの報告であったと読み取れる。【⑩】とされた。公の役所からの提出資料に基づくとするならば、最も可能性の高いのは、氏の言うように「右兵衛右衛門陣」よりの報告であろう。ただ、「今夜亥時」という表現は報告表現と取れるが、巷談街説の事実譚としての定型とも取れる。しかし、「右兵衛右衛門陣」よりの報告に対して「不根之妖語」という評語を向けるであろうか。吉田の理解では「右兵衛右衛門陣」に事件を報告したのは「或人」である。しかも、「その『或人』は発見者ではなく、ただ行きずりの人の語るところを聞いた者」【⑪】であり、報告内容は「曖昧模糊とした誠に無責任なまた聞き」【⑫】なのである。それで、果たして「右兵衛右衛門陣」の者が動くであろうか。「聞此語往見。」という事態を引き起こしたのは、「美婦人」二人が動転して駆け込んで来て、目の当たりにした凄惨な事件を報告したからと読むのが妥当であろう。しかも、行って見たところ「無有其屍。」という状態であった。これでは、事件が実際に起こったかどうか不明である。そのような事を「右兵衛右衛門陣」が報告するであろうか。筆者も事件の正式な報告機関として「右兵衛右衛門陣」が最も妥当と考えるが、吉田の解釈に沿うならば「右兵衛右衛門陣」からの報告の可能性は消え失せるのではないか。

(三)「所在之人。忽然消失。」

「所在之人」が誰を指すのか。吉田は最初「有男在松樹下」の男、「容色端麗」で正体不明の男と考えたが、それは「余りにも奇異な話柄に引きずられての誤読」【⑬】と反省、「筆者は、『所在之人』を陣に報告した—それこそ正体不明の—『或人』と読むべきである、と今は考えている。【⑭】と「或人」を指すと考える。筆者も男ではないと思う。「数剋之間。音語不聞。」が、女の惨殺と男の失踪を意味している。また、女を惨殺した男がその姿を見られたまま、残りの「美婦人」を放置する事は考え難い。「所在之人」とは、その現場にいてもおかしくない人物である。その人物が忽然と消えたというのである。ただ、「死体は、忽然と消えていた。【⑮】というような、女の屍という説は考えにくい。では誰か。考えられるのは、「右兵衛右衛門陣」の者を先導した者である。吉田の『或人』に詰問すべくふり返ると、今まで同行していた筈の『或人』の姿は『忽然消失』していた【⑯】の「或人」の代わりに、筆者の場合「美婦人」が入ると考える。惨殺死体が消え失せ、惨殺の目撃者が消え失せた結果、惨殺事件は存在しなかったとも言える。それは「美婦人」二人の戯れの作り言であり、その発覚を怖れた二人は姿を消したとも読み取れるのである。そもそも、「美婦人」とは何者か。『古今著聞集』では「みめよき女房」と内裏の女房とする。ただ、女房の姿をしているから女房とは言えない。『古今著聞集』第一七「変化」第廿七には、延長八年六月十五日に宇多院御隨身が右近の陣を過ぎるとき、三位、五位の姿をした者を二人見掛けけるが、彼らが右近の陣に入って行ったかと思うと消えた事に対して「これも鬼のしはぎにやとぞ世の人をちける」という鬼譚が載っている(五九一「延長八年六月右近の陣に変化の事」)。則ち、貴族の姿をした鬼の噂である。内裏の女房の姿をした鬼の可能性も考えられる。『古今著聞集』は「右衛門右兵衛陣に宿侍したる男、この事をきゝて、ゆきて見ければ、其かばねもなかりけり。鬼のし

はざにこそ。」と「所在之人。忽然消失。」の部分削除した。その事で「美婦人」二人の報告の真偽は問われるが、戯れ言のニュアンスは消える。「其女手足おれて地にあり、頭はみえず。」という惨状が、報告を受けて「右衛門右兵衛陣に宿侍したる男」がやって来る僅かの間に、「其かばねもなかりけり。」という事態になっていた事が、「鬼のしはざにこそ。」と鬼譚として信憑性を高めている。『今昔物語集』が『日本三代実録』『古今著聞集』と決定的に異なるのは、鬼譚としての信憑性を「陣の人共驚きて、其の人の所に行きて見ければ、凡そ骸散りたる事無くして、只足手のみ残りたり。」と惨状の継続によって強調した点である。これによって、「美婦人」二人の報告は<事実>として認知され、また、「其の時に人集り来たりて、見うる事限無し。」といった騒動の中で、「此れは、鬼の、人の形と成りて此の女を噉ひてけるなり」という解釈が成り立つのである。

(四) 鬼譚の作者

吉田は「私見によれば、<21>の『話』（注一『日本三代実録』の鬼譚）の正体は、実は、『或人』による全くの虚構であり、従って、その凡ては根底から『仮相世界』に遊んだ大胆不敵な創作実践の所為であったと推断されるのである。」【17】という。この推断には、「これだけ精密な『話』を『或人』に語った筈の『行人』が全く漠然たる影の存在であるのも訝しいし、何よりも不審に思えるのは、肝心の報告者であるが、『或人』が『忽然消失』したというのは最も奇妙である。」【18】という疑問も付加されている。筆者も右兵衛右衛門陣に現れた「或人」の虚構と推断するには無理があると思う。なぜなら、「或人告。行人云。」は翌日の<朝堂院の怪>にまで及ぶ、と考えられるからである。則ち、<朝堂院の怪>を含んでの「如此不根之妖語」（傍線一筆者）なのである。その事を如実に示すのは、『日本三代実録』の翌一八日の条に、

○十八日巳未、宿徳名僧百口於紫宸、大極兩殿、転読大般若經、限三箇日、攘災異、祈年穀也、

という記録がありながら、一七日の条に、翌一八日の<朝堂院の怪>が記されていることによる。則ち、八月（「是月」とは、十七日までを指すのではなく、一箇月間を指すと筆者は考える。）に起こった「宮中及京師」に関わる「不根之妖語」三十六種の中から、史官が二種を編纂時に選んだことを意味する。「不根之妖語」であること（根も葉もない街談巷説であること）を示すために、「或人告。行人云。」という挿入句がわざわざ書き入れられたのである。則ち、「或人」も「行人」も特定できる存在ではなく、不特定の「或人」なのである。それは「時人」と置き換えられる人である。『古今著聞集』が「時人以為」を省略して「鬼物変形。行此屠殺。」のみを「鬼のしはざにこそ。」と表現したのは、そのような認識による。『今昔物語集』では街談巷説である事を示すために「或人告。行人云。」「あるもの道行人に告げるは、」などとわざわざ断り書きをせず、「其の時に人集り来たりて、見うる事限無し。『此れは、鬼の、人の形と成りて此の女を噉ひてけるなり』とぞ、人云ひける。」という描写によって街談巷説である事を明確にしている。言わば、この騒動の輪の中にいた人達が、惨殺事件を鬼譚に位置づけた<或人>なのである。

(五) 被害者の消滅

仁和三年八月十七日の惨劇に関わって、「容色端麗」な男は登場しても鬼は登場していない。それを「鬼物変形。行此屠殺」という認識に与えたのが街談巷説である。それが不可解な惨劇に対する理解の型であったからだ。その点では「不可解な事件を、すべて鬼の所行として片付け、その記録が後世の資料になってはたまらない」【⑩】といった見方は、鬼は因果関係を公にしてはならないような事件を語る際の「理解の符牒」（馬場あき子『鬼の研究』）といった認識と表裏をなす。『今昔物語集』は街談巷説が「不根之妖語」ではない点を強調して、人々の前に惨劇の現場を見せる。則ち、被害者は消滅していない。このように、信憑性に重きを置き「内裏の松原にして、鬼、人の形と成りて女を噉ふ語」一編を成立させた。ただ、「然れば、女、然様に人離れたらむ所にて、知らざらむ男の呼ばはむをば、広量して行くまじきなりけり。努怖るべき事なりとなむ、語り伝へたとや。」という教訓は、鬼の攻撃に対する自衛の自覚を促した物としては弱い。それは鬼を見た者は犠牲者であり、この世には存在しないからである。残っているのは惨劇の跡だけである。『今昔物語集』巻二十七第七話「在原業平中将の女、鬼に噉はるる語」では、業平は「女の頭の限と、着たりける衣共と許残りたり。」という惨劇の跡を目撃、また第九話「官の朝庁に参る弁、鬼の為に噉はるる語」でも、史は「弁の座に赤く血肉なる頭の、髪所々付きたる有り。」という惨劇の跡を目撃したが、鬼の姿を目撃したわけではない。第七話の「然れば、案内知らざらむ所には、努々立ち寄るまじきなり。」という教訓、第九話の「然れば、公事と云ひながら、然様に人離れたらむ所には、怖るべき事なり。」という教訓も、第八話と同一の認識によって書かれている。

(六) 鬼譚意識

不可解な惨劇に対する理解のコードとしての鬼喰事件に対して、それらの教訓が現実的な教訓に、成り得てたかどうかを、鬼譚意識との関わりから考えてみたい。

『古今著聞集』では怪異譚二種を、纏めて「仁和三年八月武徳殿の東松原に変化の者出づる事」と題した。この題は『今昔物語集』の「内裏の松原にして、鬼、人の形と成りて女を噉ふ語」という街談巷説の内容を題にした態度とは異なる。本文において「鬼のしはぎにこそ」としながらも、題には「鬼」ではなく「変化の者」を用いた。この形は「延長八年六月右近の陣に変化の事」（変化第廿七，五九一）における「これも鬼のしはぎにやとぞ世の人をぢける」、「承平元年六月弘徽殿の東欄に変化の事」（同，五九三）における「これも鬼のしはぎにや」と同一である。「鬼」ではなく「変化の者」とした事に、橘成季の鬼譚認識があるのではないか。成季は「千変万化未始有極。むかしより人の心をまどはすといへども、なをその信をとりがたき事也。」（変化第廿七，五八八「変化は千変万化して人心を惑はせども其信を取難き事」）と、総論的に変化観を述べている。この変化観に立つならば、「変化の者」としたとき、鬼譚に対しての一定の距離を置いたと理解される。ただ、「不根之妖語」という認識と異なるのは、人心を惑わす変化の事実を認めた上で、その事実を信じ難いと一定の距離を置いた点にある。「是月。宮中及京師有如此

不根之妖語在人口。卅六種。」を「此月に、宮中京中かやうの事どもおほく聞へけり。」と改変したのは、そのような変化観の現れである。それは、「いにしへより、よきこともあしきことも、しるしをき侍らずば、たれかふるきをしたふなさをのこし侍べき。」（跋文）という編集意識から、「頗雖為狂簡、聊又兼実録」（序文）や「家々の記録をうかゞい」（跋文）という表現に現れているような「事実にもとづいた説話の集成であるという自覚」【20】の現れの一方、「たゞにきゝつてにきく事をもしるせれば、さだめてうける事も、又たしかなることもまじり侍らんかし。」（跋文）というように街談巷説を積極的に受け入れた意識の現れでもあった。成季が鬼譚に対しての一定の距離をもった態度を持ちながらも、多くの鬼譚が『古今著聞集』に載せられた事実は「彼らのほとんどあてのない出沒は、それだけ鬼がまったき怪異として人々の心に定着し、実在感を獲得した有力な証左とみなすことが可能だろう」【21】という鬼の実在感の反映という視点を成立させる。その上で、出沒の場所が内裏及び内裏周辺に集中している事実は、鬼譚の成立に関わって重要な問題となろう。

（七）鬼の空間

馬場は鬼啖事件の背景として、当時の俘囚の反乱など治安の乱れ、政治への、中央への不信を考え「内裏近い武徳殿松原の月明に心とけて散策していた若い女房は、そのまま為政者の心ゆるびを象徴するものでもある」【22】という。内裏及び内裏周辺の鬼啖事件が「藤原体制醸成期の暗黒部を象徴する事件」【23】であり「社会不安の幻影」【24】であるというのが馬場の結論であるが、馬場の〈怨念〉の鬼という視点に対して、中川 真は第八話の鬼が「怨みとはまったく関係なく跳梁している気配」【25】があることから、第八話の鬼啖事件は「鬼の発するテリトリー宣言」【26】と捉えた。則ち、鬼の居住空間の自己主張であるというのだ。その原因として中川は「大内裏の空洞・荒廃化」の現実を挙げ、「荒廃はまさに鬼の居住空間としては居心地のいい母胎となったはずである。とすれば、「荒廃」こそが『今昔物語』の話者が鬼の振る舞いを通じて描きたかったことではないだろうか。」【27】と内裏の荒廃を鬼譚の成立と関連づけた。第八話で「武徳殿の松原」を「人離れたらむ所」（人気のない場所）と言い、第九話で「官の司」を同じく「人離れたらむ所」と言っているのは、内裏が荒廃している事を指し示している、という読みは可能か。果たして、鬼譚は荒廃の説話化であるという視点は成り立つか。村井康彦は「宴の松原は、内裏の建て替え（いわば宮内遷宮）のための空間として用意されたとも、饗宴のための広場とも考えられるところがあるが、ともにその事実はなく、早くから無用の空間となっていたようで、いくたの怪異を生む恰好の場所となった。」【28】と述べ、宴の松原を含む広野（内野と総称）が大内裏の西側にあり、西の京が早く衰微していた事と関わって「西の京ー内野（宴の松原）には、同質のイメージの重層が意図されていたかも知れない」【29】と指摘、結果的に中川の内裏荒廃説を裏付けている。

（八）鬼譚の成立

田中貴子は馬場の鬼説を「内裏という権力の温床を脅かすものとして、権力構造から排

斥された者の怨念が鬼となって現れる」【30】と要約した上で、

氏の論では＜都市＞の問題がまったくといってよいほど抜け落ちており、これは氏が謡曲の鬼に対する興味から鬼の研究に入ったため、どうしても怨念を持つ鬼という図式に影響されるせいだろうと想像する。私は氏のように鬼を政治体制から排斥された者と見るのではなく、古代的＜王権＞から中世的＜王権＞への転換期を象徴する現象として、あくまで＜王権＞の変容という問題と関わらせてとらえたいのである。

【31】

と自己の視点を開陳した。筆者も＜都市＞・＜王権＞の変容という視点から、鬼譚の成立を考える事が問われていると思う。田中は「是月。宮中及京師有如此不根之妖語在人口。卅六種」が、一〇世紀の政治形態の転換期における社会不安の反映であると普通考えられているが、「これと同じ話を収録した『今昔』にあつては、事件が起こった九世紀の内裏ではなく、そこには既に焼失していた豊楽院の跡の空白が透視されていると考えねばならない。」【32】という。まさに平安末期の「古代的＜王権＞から中世的＜王権＞への転換期」に起きた「＜都市＞のブラック・ホール（空虚な中心）」（田中）としての内裏を前提にした鬼譚であるという。その結果、鬼喰事件を「鬼の発するテリトリー宣言」（中川）というような＜王権＞との対峙関係を認める説よりも、一歩進み、「実際は、百鬼夜行が何を主張しようとも、楯突く相手にふさわしい強大な体制者などもはや宮城のなかにはいなかったのである。」【33】と＜王権＞の衰微そのものの象徴と読むことになる。では、なぜ内裏に起こる怪異（鬼譚など）は記述されたのか。その疑問に対して、田中は「それは来たるべき崩壊の予感として、＜王権＞と密着した＜都市＞＝平安京のひずみを記述すること」【34】でもあったと結ぶ。この田中の結論は、百鬼夜行が一種の「裏面の聖性」（彌永信美）を現すという指摘において興味深い。「不根之妖語」の流布が、地震や洪水という天変地異とともに、光孝天皇の死という＜王権＞の衰弱を象徴させるものとして『日本三代実録』では記録されていた。とりわけ、『今昔物語集』巻二七第八話「内裏の松原にして、鬼、人の形と成りて女を噉ふ語」という鬼譚は、

今は昔、小松天皇の御代に、武徳殿の松原を、若き女三人打群れて、内様へ行きけり。八月十七日の夜の事なれば、月は極めて明し。而る間、松の木の本に、男一人出て来たり。此の過ぐる女の中に一人を引へて、松の木の木景にて女の手を捕へて物語しけり。

という色好みの物語を予感させる導入部が、一挙に惨殺事件＝鬼譚という展開となり、「然れば、女、然様に人離れたらむ所にて、知らざらむ男の呼ばはむをば、広量して行くまじきなりけり。努怖るべき事なりとなむ、語り伝へたとや。」という色好みという古代＜王権＞の行動原理を脅かす形で終息している点が興味深い。色好みの物語を予感させる導入部は『日本三代実録』の「武徳殿東松原西有美婦人三人。向東歩行。有男在松樹下。容色端麗。出来与一婦人携手相語。婦人精感。共依樹下。」に沿っているわけだが、男を「容色端麗」女を「美婦人」とする事で、美男美女の物語の印象が強めている。そして、このような色好みと鬼喰事件との結びつきは鬼譚の重要な要素であった。『日本霊異記』中巻「女人の悪鬼に点されて食噉はれし縁 第三三」には、初夜の床で喰われた女の話が載る。この鬼喰事件を大和岩雄は「単なる神婚譚ではなく、人身御供譚の要素を含んでいる」【35】と捉えているが、＜仁和三年八月一七日の鬼喰事件＞にも内裏という＜王権＞

の空間に起きた「人身御供譚の要素」を感じる。中世、色好みと鬼喰が結合した鬼譚として完成したのが「みめよき女房」（『酒吞童子』）を奪い「愛して置きてその後は、身の内よりも血をしぼり、酒と名づけて血をば呑み、肴と名づけてししむらをそぎ食」（同）う酒吞童子の物語であろう。彼らは＜王権＞の行動原理を脅かし＜王権＞と対峙したがゆえに、＜王権＞側の報復を受けねばならなかった。＜仁和三年八月一七日の鬼喰事件＞は＜王権＞の衰弱の中で鬼譚が成立して行く経緯を、我々に垣間みせたのである。

【注】

- ①久保田淳・北川忠彦編『中世の文学』日本文学史3（有斐閣、一九七六年六月）六九頁～七〇頁。
- ②志村有弘・高橋 貢・松本寧至・宮本瑞夫編『説話文学史一説話文学小事典一』（明治書院、一九八七年四月）一八九頁。
- ③大和岩雄『鬼と天皇』第六章「人を食う鬼と天皇」（白水社、一九九二年一月）一二七頁。
- ④『平安文学研究』第七二輯、一九八四年一二月。
- ⑤同右、一〇頁～一一頁。
- ⑥同右、一一頁。
- ⑦同右。
- ⑧大和岩雄、前掲書、一二七頁
- ⑨前掲書、一一頁。
- ⑩同右、同頁。
- ⑪同右。
- ⑫同右。
- ⑬同右。
- ⑭同右。
- ⑮志村有弘『奇談の伝承一説話の世界一』（明治書院、一九九一年三月）二一頁。
- ⑯同右、一二頁。
- ⑰同右、一三頁。
- ⑱同右、一四頁。
- ⑲知切光蔵『鬼の研究』（大陸書房、一九七八年八月）四〇三頁。
- ⑳日本古典文学大系『古今著聞集』解説、岩波書店。
- ㉑百瀬明治『平安世紀末・考』（河出書房新社、一九八九年一一月）九二頁。
- ㉒『鬼の研究』角川文庫、六七頁。
- ㉓同右、六九頁。
- ㉔七〇頁。
- ㉕『平安京・音の宇宙』第五章「鬼の声・都市の闇」（平凡社、一九九二年六月）九八頁
- ㉖同右。
- ㉗同右。
- ㉘『文芸の創成と展開』「陰の部分への照射一『今昔物語』怪異譚の語るもの一」（思文閣出版 一九九一年六月）二一五頁。

㉔同右，二一五頁～二一六頁。

㉕『百鬼夜行に見える都市』第三章「空虚な中心」（新曜社，一九九四）九三頁。

㉖同右。

㉗同右。八七頁。

㉘同右。九五頁。

㉙同右。

㉚『鬼と天皇』八四頁。